



特別
ル4
6315





美豆能迹比美也

○ろろい我 殿孫君の仰言素りて下毛理必

都加郡土生郷あり 丹波守君の御城へ

出さるるありぬるは先年まゝの御度毎

遠く御祖の 精忠霊神の御社のさぬ祭の式

事御心よあきらめりとのまゝひてありぬる

御城の内より今までの所をうて表の上つ代り

殿造りよりて年毎のまつりも僕らより佛を

を交へば正しくせまほしとのまゝひてこと

日本先ずおのりよき^任 流して 徳義を つく
 たりしとそののり^式を たぐ^匠 たぐ^匠 人のいそ^功
 つく^竟 ともを あひま^匠ひて 二百年
 たり五十年とありぬれ^匠 後の世のあり^匠
 ともありぬれ^匠 ともありぬれ^匠

今迄の社は 匠十の棟梁とれ^匠 任せ流し^匠 祭祀を
 神主祝部^{ハッレ}と任せ流し^匠 故^匠とありぬれ^匠
 ともありぬれ^匠 匠十の棟梁とれ^匠 任せ流し^匠
 上古の故實^匠とありぬれ^匠 匠十の棟梁とれ^匠

神主祝人の類は 神社の番人よき 寄進の物を取入
 れる事^匠を 趣意とせれ^匠 神典^匠とありぬれ^匠
 正道^匠とありぬれ^匠

さ^匠故^匠とありぬれ^匠 ともありぬれ^匠

匠十の棟梁とれ^匠 任せ流し^匠 祭祀を
 神主祝部^匠と任せ流し^匠 故^匠とありぬれ^匠
 上古の故實^匠とありぬれ^匠



根源以祖留於枝葉故其天皇短命也是以今
汝御孫尊悔先皇之不及而慎祭則汝尊上壽
命長復天下太平云

彫の天のこの教を深くおもひ侍てそのの新宮
造りし物もほりた彩り流ひて其の神社に於て
真のまゝ祀り流ひて其の御坐りし所を
疑ふ事疑ひありし事

仲哀天皇其の真の神奈に給ひべきを神慮を
疑ひ嘲りたり給ひ故に神を怒りたり給ひて

齊明天皇の朝倉廣庭
の内裏を作らば
朝倉神社の本を
移し故に神の
まを鬼ありし内裏

を壞き近侍の人
ありし死るも
天皇崩御の時
御葬の時朝倉山上
に大笠著し衆あり
て葬儀をこころひ
て之を人くあり
しありし御紀

この國は用ふる天皇早く黄泉へ行幸し給へ
よの神勅よりて俄に崩御の事よの天皇
紀にあり帝王の御しは斯の如し

そのこの精忠靈神と申すは御遠祖あり

平元忠君しかかまもくもくもくもくもく

東照大神君の御任蒙り給ひて伏見の御城

預り守り給ひてそのそのそのそのその

押さへ給ひぬれと利藤もて其の其の其の

近き人もありしを獅子て其の其の其の

蓮花面經仁王經等

虫のぬきやどがたづりやゆら^不る^意く神さう^不は
しる^不いあめゆ^不く世の人の志^不し^不る^不軍談の賣
講^不も講師が張扇もて机をたき^不て自心^不あき
雄^不詰^不し^不り^不る^不所^不く^不後の世^不あ^不り^不る^不と^不き
結^不ひて^不う^不る^不二百五十年^不あ^不り^不ぬ^不ぬ^不ぬ^不
ま^不く^不あ^不り^不結^不く^不る^不え^不が^不う^不か^不の^不神^不城^不の^不内^不ま^不
君^不と^不友^不な^不命^不を^不捨^不ら^不し^不た^不ま^不ま^不ま^不ま^不ま^不
あ^不し^不く^不あ^不り^不の^不世^不を^不つ^不と^不て^不結^不て^不撰^不社^不な^不あ^不り^不
結^不く^不る^不世^不は^不有^不る^不か^不神^不城^不あ^不り^不と^不世^不は^不あ^不る^不か^不世^不の^不

初^不び^不世^不は^不あ^不り^不子^不孫^不の^不う^不け^不し^不た^不あ^不る^不た^不ぐ^不つ^不ん
か^不くて^不ら^不る^不の^不神^不城^不な^不代^不は^不神^不子^不孫^不の^不あ^不り^不
り^不や^不榮^不え^不る^不さ^不う^不え^不あ^不さ^不め^不か^不の^不を^不世^不の^不あ^不り^不
し^不神^不身^不こ^不そ^不伏^不見^不の^不神^不城^不え^不し^不た^不結^不くれ^不る^不
和^不御^不靈^不の^不大神^不君^不の^不神^不身^不を^不身^不護^不し^不結^不る^不
矣^不物^不劍^不戟^不の^不災^不を^不防^不御^不し^不結^不る^不荒^不御^不魂^不の^不
先^不鋒^不は^不進^不し^不結^不る^不御^不方^不の^不諸^不軍^不士^不の^不う^不る^不
り^不て^不結^不る^不賊^不徒^不を^不こ^不し^不大^不平^不の^不御^不代^不と^不る^不結^不る^不
り^不て^不目^不は^不あ^不り^不る^不神^不祇^不の^不正^不道^不を^不得^不る^不人^不の^不

先蹤古例あり事明らざる

真忠の勇士君の為に命を捨てる靈は皆之の忠元靈神の如し

○九日御暇乞として番所の御館さまの御
また舟たの舟の舟の殿舟の舟の殿
く舟の舟の舟の殿舟の舟の殿
ぬ舟の舟の舟の殿舟の舟の殿
ぬ舟の舟の舟の殿舟の舟の殿
ぬ舟の舟の舟の殿舟の舟の殿
ぬ舟の舟の舟の殿舟の舟の殿
ぬ舟の舟の舟の殿舟の舟の殿

あつたはこれに御暇乞てさるぬ

○廣のえい十口暇乞し御館さまに
かの御館さまに御暇乞し
おのれいごおられず十口暇乞し
かの地よりいさく心うまへ
ふみしあられいうはま杜捷
あきしむもさあれと子ら
ゆるさるに御暇乞し
てゆきし御暇乞し

いふくも入給ひ一事もあれ
志願し女志すゆり給ふこと

○その一 新旅路の初き迄在りて
兼りしハ安永九年より十三歳ありける七十
又及ぶその後京大坂延見一信終兩宮
参りしハ寛政元年より二十三歳の時ありし
と六十餘年より又後下徳香取鉞
子常陸鹿島筑波等之行も文化七年より四十
二歳ありしや四十年昔ありける新旅の

るいふくも志すゆり給ふこと
て凡十餘年よりいふくびのいふくも
力も強き事ありし君の御供も陸路よりゆき
らむも列のいふくもありし其れよりいふくも
○土口将中法眼君の御給の御供もいふくも
をいふくも給ひしものいふくもいふくも
をいふくも
北風もいふくも旅路や定むる翁も有る衣もいふくも
とのいふくもいふくもいふくもいふくもいふくも

旅衣をきくらへき 脚負の唇をきよ老も空しくぬる
 その時脚くよあつて 飯島助九郎 養重
 待つけて又も逢えん 我大人ハ八十云々 老の身あれが
 老の身の八十みごとむる 又も逢えん 飯島助九郎
 又將野勝英 枯信
 師本島の庄とよ大人をさうしたるれんものさくひん
 こうれがたきさくの 師本島の庄をさうしたるれんものさくひん

又陶山重太雅純

あまのまこといん 後ハ師本島の庄とよさうしや
 師本島の庄とよさうしたるれんものさくひん
 本間 旅衣をきくらへき 脚負の唇をきよ老も空しくぬる
 飯島 助九郎 養重
 待つけて又も逢えん 我大人ハ八十云々 老の身あれが
 老の身の八十みごとむる 又も逢えん 飯島助九郎
 柴田 主計政方

こころもくもくをくば思を主生のわき後とゆんやうと書か
つし

まより又も主生路の思ひ川に流し思ん思あはらふ

○十二日 中の思 次郎君の御館よりあつきの御館
申してうづらぬ

○十二日 上つ御館よりあつきの御館よりあつきの御館
あれは志さす 御まより侍りて例のこころの

らかともあつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館
ねかへるまをかくてありしるるまをいいて

こころもくもくをくば思を主生のわき後とゆんやうと書か
つし

あつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館

殿の思あつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館

御まよりあつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館

そつとせ給ひらふ 御館よりあつきの御館よりあつきの御館

ねもあらあつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館

おつとあつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館

なつとあつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館

いらふもあつきの御館よりあつきの御館よりあつきの御館

ぬまのそらに秋の空きりよ寺のこぼれまきこる日の村
の寺の傍の農家も樹木もなき裸のまて徒侶二人
人いりても名は温氣坊土用坊といつりこの村の庄を
い六月夏をまといつりとあんないうる故あんな

越後高田神田村より富永春部ハ門弁を傍廂
をこころいおせよハ越後より信濃ハ信濃屋
六月村といふありて炎夫寺といふハ門徒あり
住持の妻ハ代ハ照とらふとあんな同日の法
それあり竹の塚をゆきてま加めて屋の飯とらん

人といれどすありハ万久利もて鱧ハまほしき
加藤まをこて種ハ谷よりいりしりハお末町
もこころいれどあり万久利ハまほしき一里ありそれ
より糟壁のやうり近うれハかきもかくもいりて
食てんといふるせんせくあそれハこまてたうハ
いりて万久利ハこの種ハ谷ハ断を入りて
とつりハもまらありハ万久利ハこころいりて
くれまてこころいりてハこころいりてハこころいりて
くらまてハ宝山のかりる知りやあんなまねハ箱登

のさく^宿はやうに^新ひ室るれいまで造りてんぞくうい
遠田ありていつとをこし

。十町をこくを立て杉戸幸手を経て粟松の房川
のまごらうあまそ昼の敵といころな軒のあら物あり
りそありしそこよりたごま房川舟ごころこ
あさ川ものほれいぐる奥の名にるまらるる軒のあら物
それあり中田古河野木友沼をへて真田田よやう
あやうりまを造りて扇箱舟をこりてきて来て
ふかふか人こころありそは及ぶとるあ掛板箱のさう

礼よ棚倉家中齋藤可憐とあをそて改進ひまじく
。十六日こをむて小山の先る木沢ありたごまゆけは陸奥
街道をそたへをひて日光道をゆくは島田金太夫を
遠への使としてありて云く是よりたごま飯塚乃
本陣さうて来るべしとくまを本陣といさうぬれは
仰言蒙りて馬をそせてあはら江たより仰供
りてありし大島金七郎しかの本陣にて仰言傳へ
らひしとあもたごころと時くさうくい
せんさうし禮もあく飯田去秀を遠へらねるをそ

御供もて来りし御例もく警くもくしよて旅中のあぢ
御尋のたしくれしう姿川舟もくく又さくは黒川
舟もくくせり下りて小倉川より合て思川といふ
古々も君のあは言作を何思む川神めくもらん
それより大島氏ハ早馬を鞭うちてさくくたてられん
やくま生の沢よつきて 御城の大手前を問屋
船橋半兵衛といふ門は我父子旅宿と記しよ
張札のやとりよりくさて 君より御便とて又
大島氏よりくさくれて何もごとの 仰言給ふ

菓意種々許多
一不死の薬菓もありしハ崔躰してあはこひ
る久利よりを空くしつる空くくもて得つ
るあはよりさくくさくくさくくさくくさくくさくく
近者七郎左の舟もくくその江戸舟備山三郎
の兄もくくさくくあはくくくくくくくくく
○十七日こゝに新三任し給ひ 御宮附る秋山駒次郎
権蔵を以て係濟保之悪人殺すくまはれて程々
門定めてよりぬ程もさく 仰言あはりて片不礼助

まゝこれ 仰言 伊く云く 御河 一々 水く
さる程 言なき 職する 終本 文部 小島 彦 言 預
加司馬 三人の 文きて 今日 昼過 次より 登 城 あり
しき あり され しかば あり のを 申上 して して
こころい せめて 人心 ゆく ぬ ぬ のを や あり せぬ
よそ 仰 候を かく 守れ 古比 の 凡 義 あり
仰め 又 仰民 の 實 言 ぬ 室 の 八 島 も 見 えて ぬ ぬ
志 ごと あり 未 の 時 子 子 以 仰 候 又 あり の 向
さら 仰 の 思 心 治 しい 仰 仰 人 ころ 言 なき 職 の

人 ころ 川 の ねて 二 の 仰 あり 皇 神 の に 宮 あり
り 洋 あり あり あり あり あり あり あり あり あり
然 して あり あり あり あり あり あり あり あり あり
治 いて あり あり あり あり あり あり あり あり あり
仰 皇 神 治 いて あり あり あり あり あり あり あり あり
それ あり あり あり 末 社 あり 十 余 騎 の 殿 あり あり あり
遠 祖 皇 神 と 友 あり 伏 見 の 御 城 あり 討 死 せ たり あり
真 忠 の 首 あり 七 あり ち の 皇 あり 何 ぞ 武 雄 某 ぞ 武 雄
も 孫 へ 始 て あり 社 を 起 して あり あり あり あり あり あり あり

有る事たり^足ひてしる事もころうきいひあられ
あふぬり^田といたるねのさまよこし^田したる事
これいありのときよあふぬり^田するれ

明やみ秋のそねれどねつれるさる圍のひまうま
。十八日^田後中根弥次助使とて人まう又飯田^田医
もま^田れ^田り又藤本礼助あり^田せ^田り^田あり^田て
申時ありのほ^田る^田く 仰言傳て^田る^田れ^田り^田それ
あり^田の^田張^田の^田法^田守^田の^田世^田参^田らん^田を^田豊^田啓^田を^田の^田て^田や^田り^田
の^田ある^田と^田ある^田い^田よ^田て^田け^田ら^田る^田は^田田^田畑^田の^田中^田又^田一^田ひ^田り^田藤

つる^田橋^田の^田古^田本^田の^田表^田あり^田ころ^田は^田古^田雅^田有^田社^田あり^田雄^田琴^田
神社といふ祭神ハ舎人親王^田とる^田らん^田よ^田こ^田こ^田日本
書紀の撰者よそお^田り^田り^田お^田り^田つ^田れ^田つ^田き^田
よ^田人^田あり^田て^田時^田を^田し^田つ^田れ^田は^田申^田所^田も^田よ^田お^田り^田て
所^田城^田の^田ま^田りの^田ゆ^田り^田よ^田あ^田れ^田の^田冬^田の^田そ^田の^田類^田
う^田さ^田り^田よ^田る^田を^田こ^田ろ^田り^田ん^田ん^田の^田ま^田ひ^田く^田れ^田や^田て
宮^田よ^田ま^田の^田い^田ろ^田う^田て^田れ^田あ^田ら^田め^田後^田忌^田も^田て^田あ^田り^田
よ^田る^田よ^田あ^田ら^田ん^田ん^田い^田ろ^田う^田も^田あ^田ま^田り^田る^田あ^田く^田り^田
よ^田の^田ひ^田く^田れ^田あ^田れ^田の^田式^田を^田こ^田り^田く^田そ^田ろ^田の^田御^田宮^田

附の人々よりいきて又脚敷までくまのたぬりの
好い此物預るどあつて成りてはやうにうら
。十の程よく飯屋に 君の脚便くして奉り此脚大刀
脚生馬脚備の式 脚油合の類にへらねるま
脚帯申上りてまたよりつき 脚揃のほり
。 脚の君 靴の程より風折馬帽子脚大紋よ
て参り給ひ 脚大刀備へ給ひ脚馬の鞍上り幣帛
きて拜殿の前より口をくちり給ひ給ひ脚
く祝詞のし給ひ神はつてを給ひ束ねを

古今集
大京や小陸の山
も思ひ物め

拜く給ひてくちり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
又二十余騎の子孫の徳士つぎくよ拜くをりぬ
いとたかきく 覚えぬは小陸の山もくちり給ひ
え給ひきくちり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
おの心も給ひかづらひくちり給ひ給ひ給ひ給ひ
た^称言^竟をくまきりあ千余騎の衣冠神くちり給ひ
祢言申をくて罷れりくちり給ひ給ひ給ひ給ひ
部もがやりの賣祀の者ども参り給ひ給ひ給ひ
中へる事織りくちり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ

吳竹の伏見の里の御城さうも^頑な^狂たがれらが奪りん
をうらみまよま 東照神のそのの鏡る大所心よ
つるき大刀鞘めめけおて櫃の室のひらう せごわ
天がけるるちぢりるよ脚りきりの御言たごむ若
るん堅く守りてより来るあさうら友の利^ト謙^ガもて
るよ^如難もごろ川拂ひさうり^如流ををゆるるま^如魏の
奴がたをうりよ^如邪さうま^如せといさをく^如武を内^如並の
吹風のめよこそえ^如ぬ脚代を^如もさうい^如流ひ末
つひよあさうら^如友のこりく^如よ^如そ^如ま^如ぬ^奇をさう^如ま

乞の脚を並を毛脚の玉^如加の那の主生の御 御城の
まをい^如流の^如底の^如足根よ^如ま^如花^如古^如ま^如た^如り
大元よま^如本^如言^如ま^如つ^如ま^如人^如た^如ま^如ま^如人^如ら^如家^如を^如れ
身もた^如る^如ま^如た^如い^如ま^如つ^如ま^如ま^如め^如新^如ま^如ま^如
還^如ま^如り^如し^如脚^如並^如代^如の^如大^如ま^如ま^如脚^如食^如ま^如ま^如
千^如類^如八^如百^如類^如大^如所^如海^如の^如雍^如上^如高^如く^如麿^如腹^如こ^如ま^如ご
並^如居^如海^如川^如の^如鼻^如の^如尾^如鱗^如の^如廣^如き^如狭^如き^如沖^如つ^如澤^如を^如
津^如原^如地^如の^如甘^如菜^如辛^如菜^如ま^如の^如ま^如を^如千^如座^如置^如
戸^如の^如ま^如の^如ま^如を^如た^如り^如て^如ま^如の^如脚^如の^如ま^如を^如た^如り

ほが言まはる

あるたゞと遠く申物の脚校威もて脚子の徳々業は思ひ
たぐさるるさあへてことごとくねがひかくしひても
不足あふね又よめ長弁

かげまへもほふたぐくいとまへもあふふうこま脚心の
程く忠有脚キヨ宝神マメ神ガミのここの石上イソノカミ古き古き
脚心キヨよ不良かりり〜良年毎の足の式もろくは
そむきてあれは海あり長く正しくい〜人の式をたへ
ぞあつら真具らさうつらあたへくるをうり作のあま随意

礎イシタテ也イラカ梁ウツバリ柱ハシラ桁ケタ 蘆エウリ薈ハハギ 檮ハハギのおちもろく 榎木
並べ大空は千木高きりて簾ミス張トバリ御宝器ミタカラウツワ おと
ごよ是造り竟つても月よりあ〜大殿の
君のこころは清まらう御衣御衣 とうらうさひま
ありぬら申物人脚もこの人もあぶらあぬらさう
かきた一言さきめぬれい我も〜も脚最も出で
伸頭つる突ね梅つ木きぬ祝ま詞 かのう称した申てあか
てつ〜脚心あいくふ代も法則と定めたまは
トと脚心あはせて誓らるる 殿の脚言は

彦麻呂門下と名のりて彌本孝之助定邦
山田鼎之助隆友とらふ二人ありきとあり
あさぼろねとあるとせぬと種々のとけぬ
とけぬのこゑもねとらふはあまのあま
ぞおもてあせの故もやあへんその二人のまじり
短冊をもしりて定邦が心をいそぐ心ぞ
あり實に我門人北本並枝とらふ若下総
舟橋御殿に仕へしよしとらふ舟橋御殿
賣女をぬてまのきとらふ並枝

あゝがオあゝ美人くをいむべきをいふをを
うーつとらふよ

萬家乞ひのよとまつる中尾川鬘舞翁とらふ老人
九十歳とて梅を画きとらふ
梅枝を画き一人の齡とて我は八重の花の兄
又女のまをひひく下の後よ
現の者のうらぬ程よあひえんと都よつてよまの備え
ゆあまけて申候へのほるとて作給ひとらふ
程もあゝまののりてとらふ作給ひとらふ

脚のまじりのすを^終つれがせざる旅をせまほしきあり
歌ひをりしと脚ゆるし流いてあはし年時三宮流り
小倉川のそ新の細川せんを^幸をのそはへきあり
信立しけ流りうりく流くさうく流いてやうり
うりや^幸流りまよりし流いてやうりひめ
十日折つ^幸き口のきまより三日の江戸を^幸流り
小倉よりて十宮よりつきてうきめありく登る
飯田より一^幸流りまよりし流いてやうりおそ流り
しくかこき一大奇事あり小倉川の^幸脚板乃

^後ありは^幸流りまよりし流いてやうり
脚^幸葉^幸履^幸あり^幸かち^幸あり^幸お流り^幸い^幸や^幸き^幸翁^幸の^幸り^幸お
り^幸脚^幸流り^幸つ^幸き^幸て^幸け^幸り^幸か^幸ら^幸む^幸し^幸り^幸の^幸た^幸り^幸又^幸と
あ^幸ん^幸や^幸ハ
足^幸根^幸本^幸根^幸水^幸脈^幸ふ^幸き^幸う^幸い^幸む^幸り^幸も^幸輿^幸の^幸内^幸足^幸膝^幸た^幸ひ^幸き
さて川^幸き^幸よ^幸ら^幸う^幸て^幸い^幸れ^幸は^幸い^幸調^幸布^幸玉^幸川^幸を^幸柱^幸ひ^幸列^幸る
む^幸う^幸の^幸さ^幸ら^幸ひ^幸む^幸ら^幸れ^幸る^幸水^幸の^幸流^幸き^幸も^幸た^幸と^幸ん^幸は^幸お^幸は^幸し
流^幸き^幸一^幸つ^幸き^幸あ^幸め^幸り^幸の^幸店^幸の^幸お^幸明^幸ら^幸ま^幸こ^幸え^幸て^幸新^幸あ^幸め^幸り^幸
く^幸あ^幸め^幸り^幸の^幸さ^幸ら^幸う^幸く^幸い^幸れ^幸む^幸の^幸人^幸は^幸脚^幸板^幸乃

さきぎをきいてねんくわうぬ

○北口銘くくは硯の格本の方へ引それありたまた
平山は矢張りんとて僕をぬてむけぬあつねのねの飯田はこ
りさあつねそ奇多を正よき鐘あつねとてうとて
招うすゝ随ひて引たりそくてふ 卯城前住居よら
町の正中は一筋の小川あり 木りと住一は川は紅葉ふて
漬置よをくれが 諾もよき果もそ江戸よて筋とて
んこのまも鐘をぬめりや 卯城の壺七年ふすれとて
飯田もすもあつねくもも大なる器は内あつね入て

香中へ鐘りさへ入るをそ統づもささのそあつね
くれはさても卒病をそ折の葉をそくもそ一のそあつね
あきさるふあつねはつしはつてう 鐘鐘りそ多めく
して一日もかくるるあつねは鐘は飽果つれど鐘は
いよごあつねあつねとてつてまつげてあつねさう
さる程は 卯城より百あつねまうのぼりつねはつね
卯城は書院にめくれ卯城を所神祝とてかつはつ
旅をの卯城のり一のそあつね 殿と鐘つねとて
しく卯もそくの既居をそつれも悉く白木器よ

土呂葉杭等くしらの後ニ神の位ニのぼりつゝん
我らも我身ををくみまむむらうとくろを^清ぐく
そのもほゆる又即まへて三人はぬぬひーをか
らありいふきはさげ又のうぬまうらつゝはま
るるはくあんあうら

元テ終るくううみ人くやうのあう一は扇短
冊皇お横拍色紙帖るぬぬがさあくをくさく
ひく日はまうふくれのぬぬくて杖つくひめてぬき
くれ文字もよろほひすもらうをれつれせん

まへり一をけりり 守^{カウ}の君ハ磯山ハ遠空一はく
我ハ馬ををせんるあやうく豊破を即ぬく人ハ
まへにひあゆくのぬぬてをせけりぬぬのぬ本
之藏ふいざあつれそ室の八島ぬんとてぬら
なき磯の人をを^歩からうぬぬおのれぬぬ物
い^無む^礼いのぬぬあうら老^託ぬかちてゆきぬぬ
ささうにまけてぬぬが標標ぬぬる中ニ社あり
鳥居の額ニ正一位室八島大明神とありま旧社
あうぬ事ハ先志ぬぬら

いりへ郡縣の以、神社を位階を授けらるる、神領の考へ度々の校位、神領加増の考へ大社旧社とくとも正位、稀く神田外断りて現年二千石あるれ、容易あり、法建とありて、神領御朱印ありて定りしれ、神田加増あり故に位階の昇進もあり、位、社領く神の御身より人臣の位階を何より、法とべき又大明神と号し、非華経ありて佛号あり、旧社あり、いれ旧社ありぬ證く

あさりりる方、六間の所、小構を掘り、中より、柱筋、土堀り、下あり、小社を八立て、室の八、山と号け、えも、いそ、ぬ、つ、さ、ま、小刀細ス、勅撰の哥、弟もあり、て、ま、ま、れ、を、か、る、小、度、の、ぬ、く、あ、ん、や、い、さ、れ、と、古、新、ま、い、糖、と、あ、い、と、よ、ろ、い、い、い、う、海、濱、あ、ぬ、い、法、屋、も、あ、い、う、い、た、あ、あ、ぬ、い、炭、竈、も、あ、い、あ、の、ま、あ、を、い、あ、ま、い、あ、ひ、い、け、ら、田、畑、の、ま、あ、い、い、う、い、い、田、畠、も、あ、い、人、あ、も、掃、き、屋、を、郡、系、の、下、ま、あ、

ありて銀子の炊煙をのびをさるるまにわづらひの
人おいくわねも秀輝をあらわしにせしむるわづら
とあのみく見えつらん升より煙もくきとあり
めら故みさり号一ありん

ふほくろ惣名を室とらひて何島村某島村を
島とりふ名の村儿ありといふも八島の八なるあま
しるひ言こ八ハ弥まで數ふらうくくく八まね
八がく一はあといふ八ハ弥のあまで八まうくくくはかく
いハ論書めきて紀はるハ何げあらねいとわねかく

まれとくひのさ

かしてあつやうとよくでたよ 卯梅のぼんぼん
くもそくくくくくくくくく かの殿さ
おのほひさねハ卯梅を卯梅のうらうらうとせよ
くうて徳もくく 卯梅勤徳さうのーせしん
あつてあつてハ卯梅と友よさき後あり
言眞監物う許 招うねらう新宮造管のらよ
つきて志むく連一くハ卯梅も行くも
あつてあつてあつてハ卯梅も行くも

こといふ事よ入て旅のし事もききしむりてねも
 るまよれいふんとみる程もさぬのさ^{田舎}な^心
 へらる者二し人おのれいふありとやてすし役の家
 むれの上ものけいんか^いと聞みて板次の侍をもて
 扇二ひづりてふいこ^いのころあささ^い
 どりわよとぢちりるれい^いのさあう^いてうきさや
 つつやとらよふりてあはれお^いの心ま^いとや^い
 〇たうおのれま^い花を旅なれ^いお^いのさあ^い
 せりよきてねい^い入^いつ^いべき^い飯^いの^いま^いと^いと^いめ^いは^いて

世に法友は旅立して乃もく^い心をつけてつ^い
 けい^いも^いな^い送^いう^いし^いり^いて^いさ^いり^いき^いさ^いせ^いの^いこ^いま^い
 多^い旅^いの^いね^いも^い旅^いを^い保^いま^いる^いす^いと^いか^いら^いれ^い
 一^いく^い世^いも^いあ^いり^いと^いも^いさ^いも^い脚^いあ^いる^いも^いん^いま^いさ^いと^いう^いく^いか^いづ^い
 あ^いう^いあ^いう^いて^い時^いを^いう^いら^いい^い抑^い付^いる^いさ^いれ^いお^いら^いは^い堀^い氏^い旅^い
 姿^いあ^いて^いま^いな^いれ^い小^いの^い送^い送^いし^いん^いと^いい^いら^いう^いこ^いあ^いひ^いて^いま^いま^い
 くれ^いと^い小^いの^いを^いま^いて^いつ^いこ^いあ^いき^いり^い一^いん^いと^いけ^いて^いさ^いり^い
 申^いせ^いと^いの^い保^いま^いく^いと^いい^いら^いは^いあ^いさ^いも^いひ^いま^いひ^い
 有^いら^いし^い脚^いあ^いる^いを^いか^いこ^いな^いも^いれ^いう^いと^いう^いく^いあ^いら^いは^いと^い

飯塚よりうねねが本陣までさきへおきしむ小の
引て人へぬのさうりさうれをさうり飯田氏と
ともよりのゆえつてあてまの田はさうりて登の飯とい
又友治もそやまへい入ねの障きくは古河のやうな
つぎぬを生れりこまをさうり七里さうりたす少心の
あまやめさうりつりぬへん

。古河の演習さうりたさへて松杉の並木をさうりつぎ
さうり中をさうりさうりさうりたさへて外約ねさうりやまへ
さうりさうり川さうりさうりさうりさうり

幸手をゆえ格戸を登の飯とい禮登をさうり
万久利よりさうりぬれど又さうりもおあさうりぬれ
備よりいしてさうり買しそそ越谷迄もていぬさうり
さうり日さうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
さうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
農家の軒をあけびさうりさうりさうりさうりさうり
さうりさうりさうりさうりさうり

秋風の雅をさうりさうりさうりさうりさうりさうり

あまびい木通さうりさうりさうりさうりさうりさうり

ふしりれしるが女陰は似る政の若く海山用を海男
子としひ貽貝を東海夫人としよ類く散木集
ふしれ山の女をあひよる 仲実

胆のふをばやうこ島よ 俊頼

胆のふハ蘇^{トコロ}を野老としらん海老を海の羽とよれん

又原大府集よ

いづかう心りくぞおちよは山姫のふめりれんて 琳賢

いづかう君が心よおひてやけいれのふむよおつらん 行宗

このひハ越が谷よやうて万久利の類をくひよるよ下

かうハ謠もむが収てうり 飯田氏の創の片廣纏くれ
より身破ハ故ありて纏くれふれハ鮫の蒲焼ありて
るぞはかうとくごの白浪のうりよまは漁ありてを得
つるこちやせんといとほくこま

元五の卯をるうけやうを立て加布奈る加行の塚
るぞこそる位よりしりしはあまよ已時をうりある
院川恒花尚清近友園右郎國足くまぞを運
られかうあやうくよねを立日とくくるとるあり
るころきをいづきさくると思ひやうらふるを飯

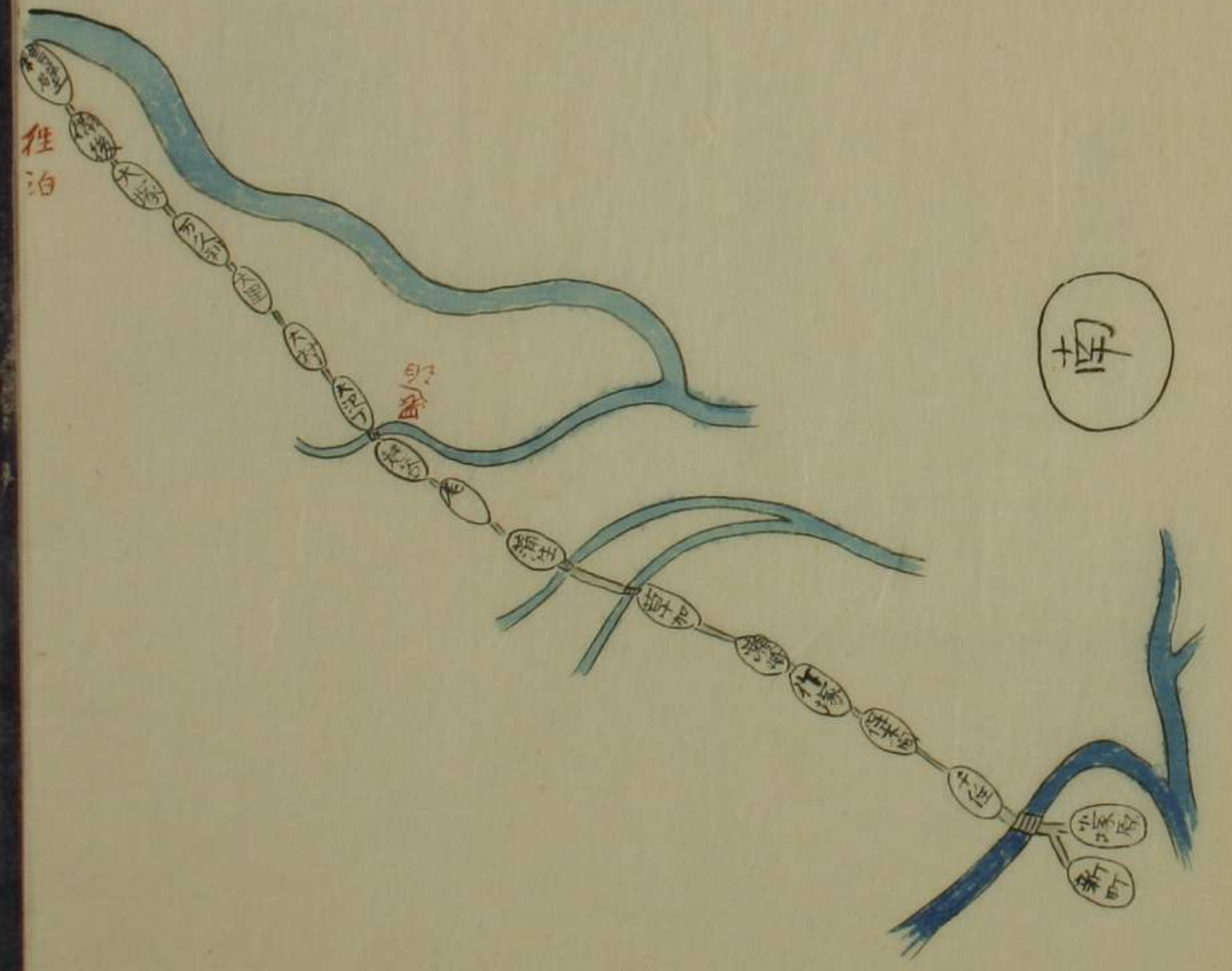
くひ海のこゝて後田氏のくらりの事所の屋のたよりよ
くらびこうくアおのこも通なれはあるもあらが
らたとりまさままこまこうれん及もうこいづよ
くりしをよ這よをうめなれしらめさうじとて
厚く謝してこうれぬ後田美方市幸及方村民は勝
直も速くこして千位まであらわせたとたぐて
立こらたるれむらりことく下谷山徒所
江戸橋通り新橋より八十本橋下より右ませの
ちお子と孫の傳えふくを送くこあかて法友とおねよ

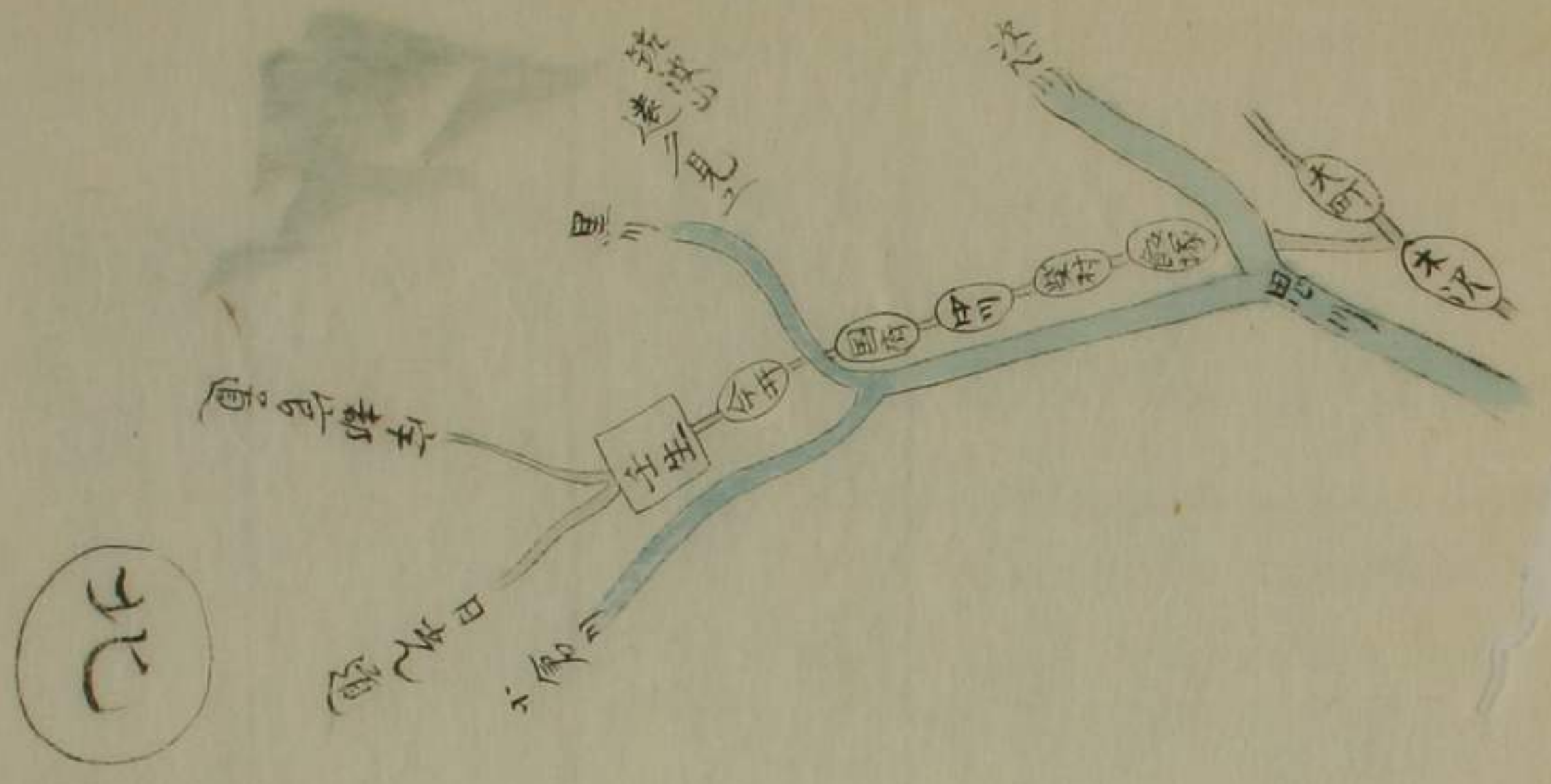
つきぬらハ昔の所をうるえまりう上つ所銘をまりの所う
殿の君の所へ人この君の女房とちこのの
うへ入て又申役の節へト在けて家こうう
ぬれが恨びとうて所せきまで人とああとつといま集
て海のこうり時をこらせれど取まきで取まれんこ
ううこう後も志さりのあらりあり
けいびいゆきもあらしを殺にぎひまむ家を安きで
あらりの節も所の申銘の侍女八十位こうう
くの君の作言傳くあもらりの所急のくこまき題

へげはるり申すおたけいりていふまじき事
 老の事の家をいふまじき旅をいふまじき事
 ういふまじき事いふまじき事いふまじき事
 能くおまじき事いふまじき事いふまじき事
 せいでいふまじき事いふまじき事いふまじき事
 せいでいふまじき事いふまじき事いふまじき事
 おいふまじき事いふまじき事いふまじき事
 七和永二年七月末に於て

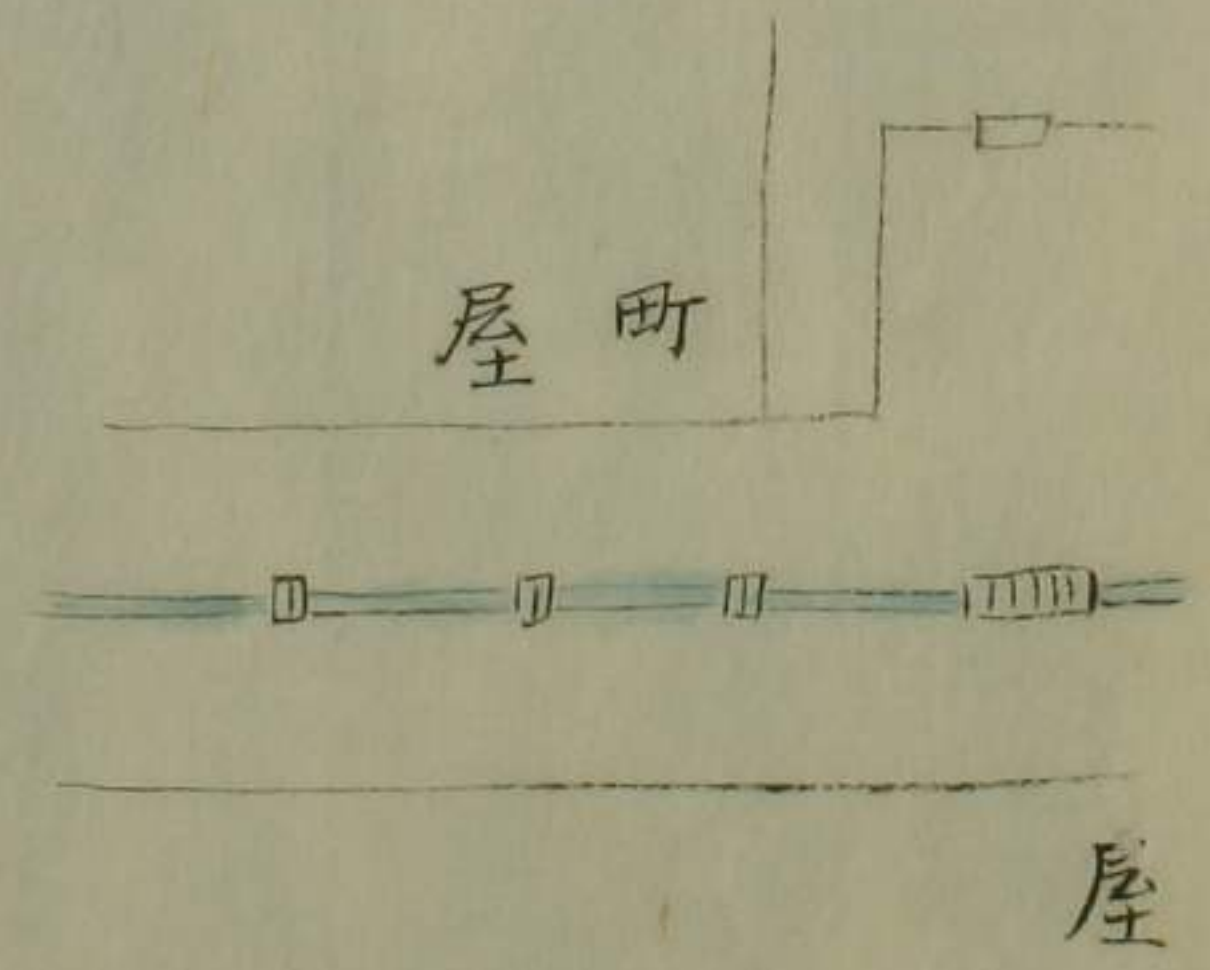
八十二歳彦太

南

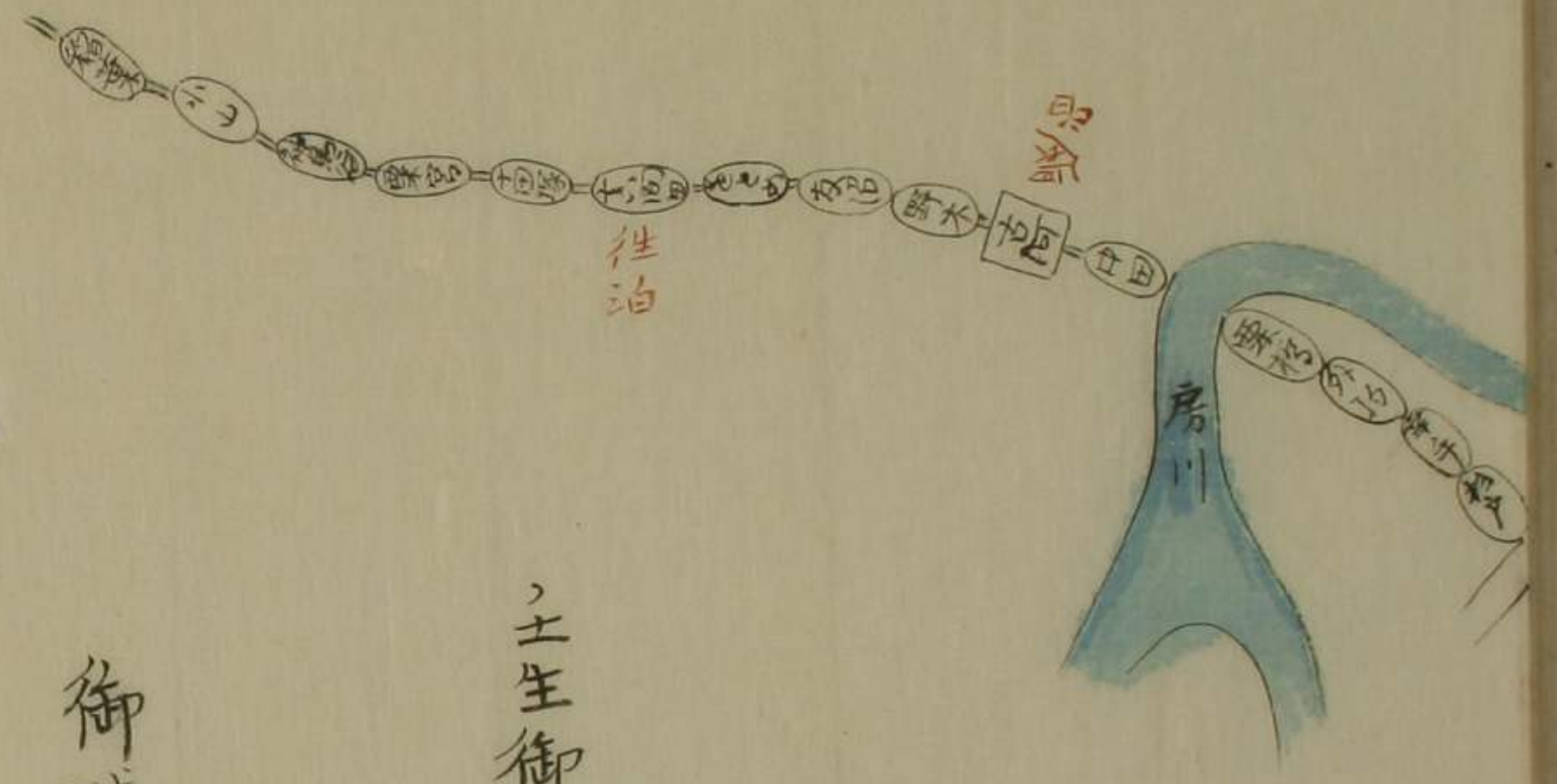




北

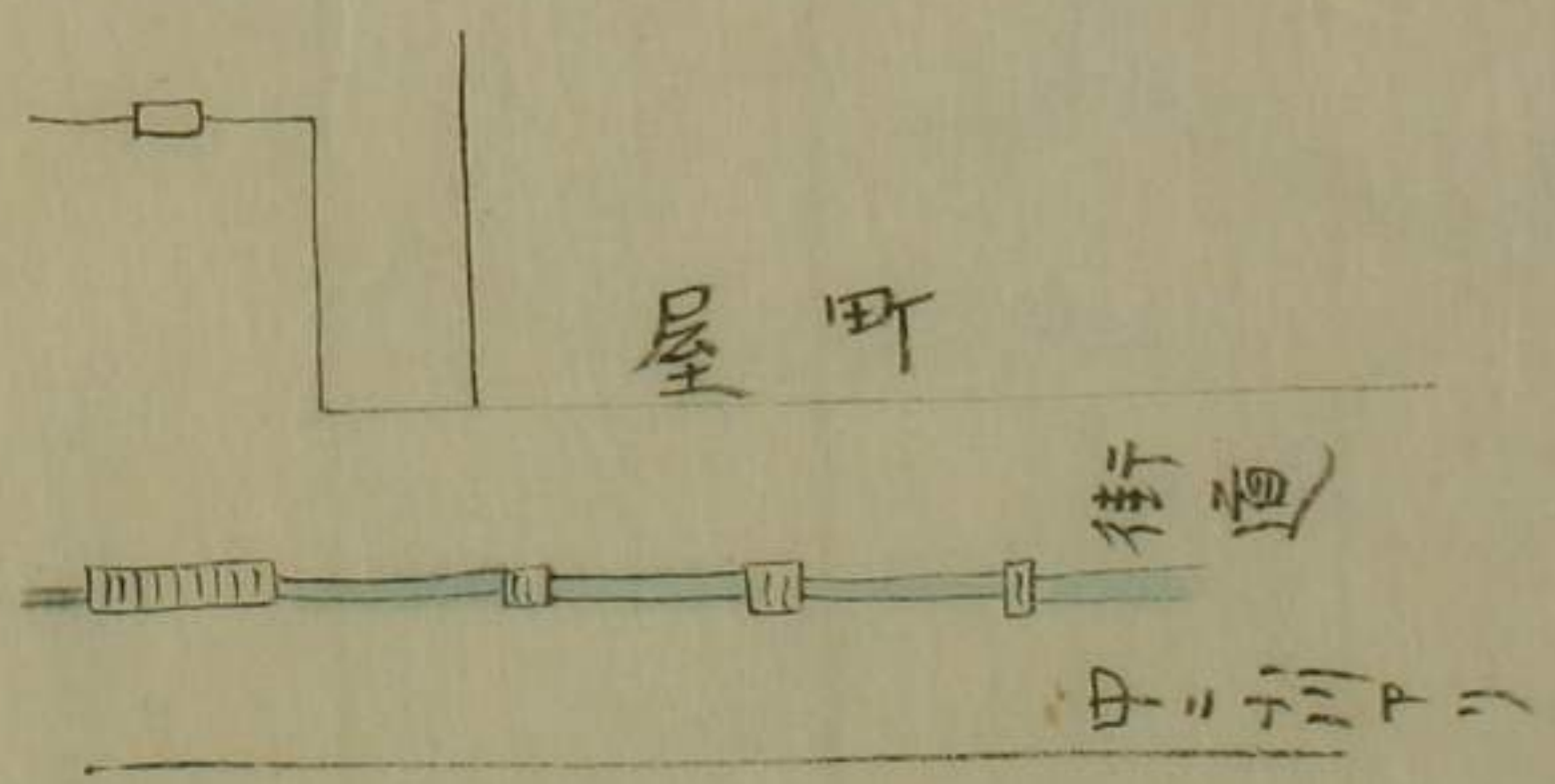


屋



御城内

土生御城下

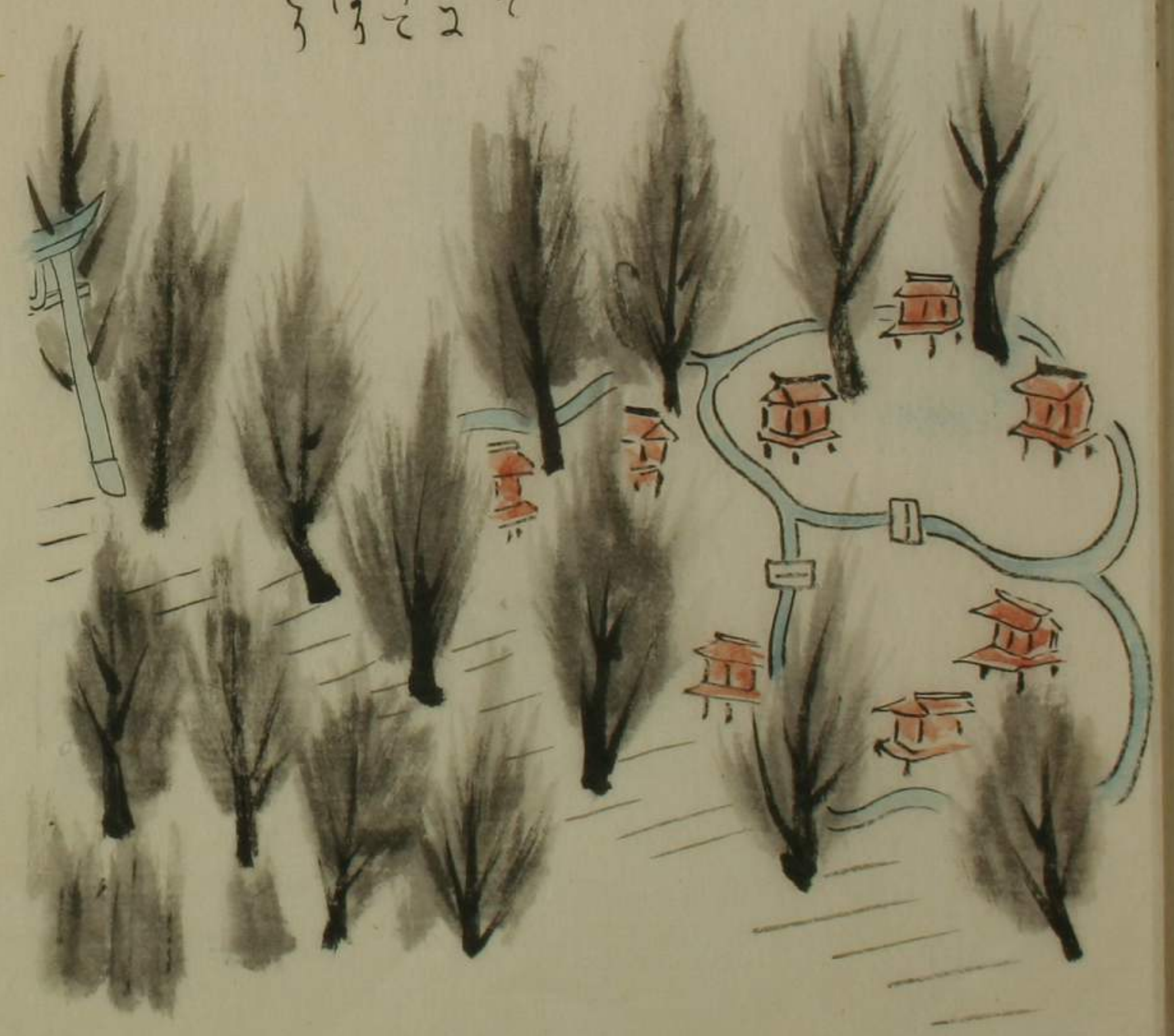


町宿

街道

宇都宮道

後人つくりし
 室八島といふ所の
 四方五六間あり
 溝の幅一尺なり
 深二尺不足
 いろをこの者が
 かくる小庭つくり
 勅撰の哥集を
 及古よりたぐれ
 事く
 平地を掘分しるのこゝ
 島の飛ぶあつたれつこ
 堀分を八島といふ所
 いたるべきを三島といふ
 といふて小社なりとて
 とて八島といふ所

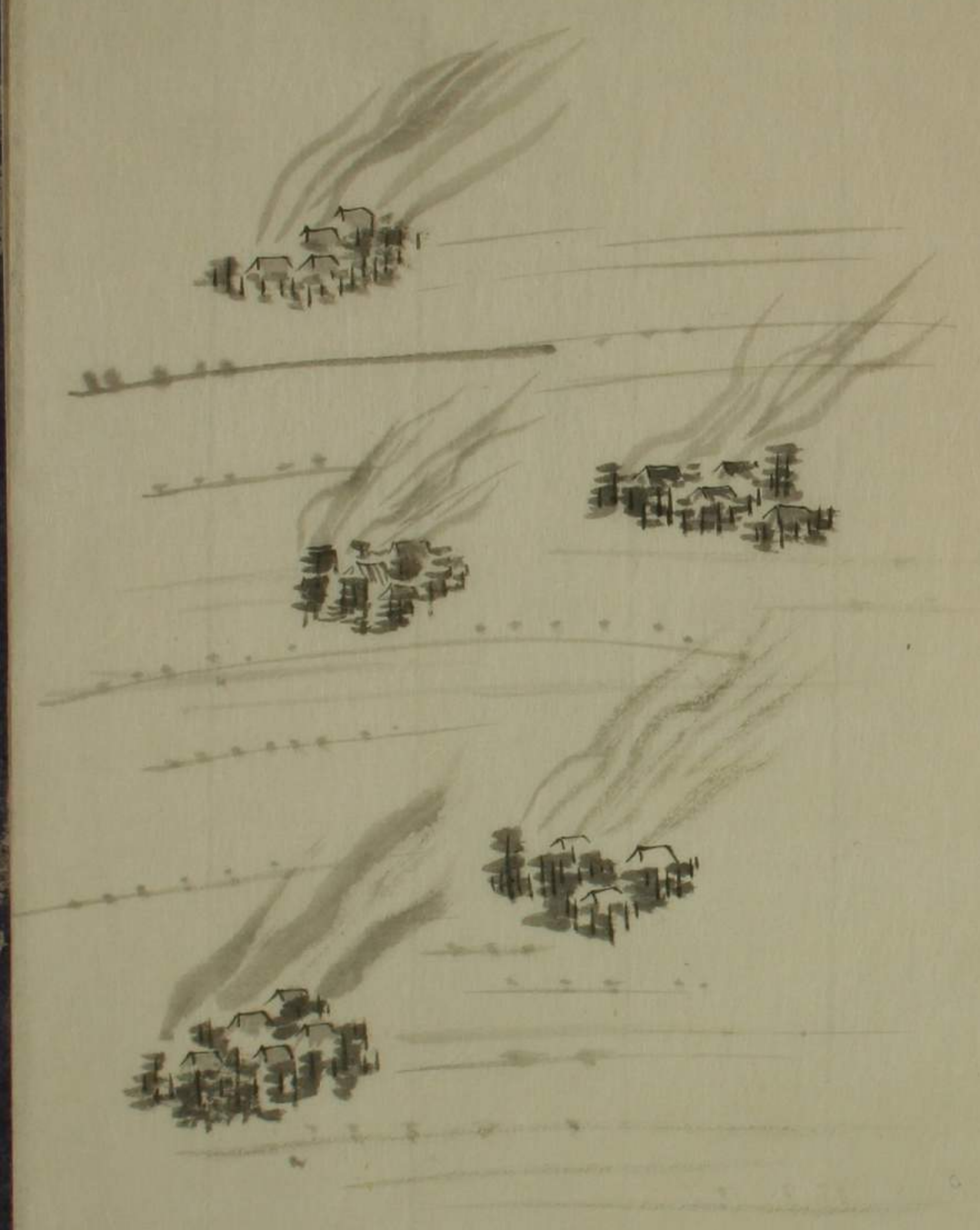


此社祖の新宮を
 壬生れ 殿の君が遠津御祖
 精忠霊神の御社を是とて社を之
 てわづらひて造り給ひ奉りたも
 改た給ひて始り一くくくくまての
 系は義経御もたし 給ひ奉りたも
 をうまひては給ひ奉りたも我をま
 わりて給ひ奉りたも我をま
 神心も此社の心もいふもらひ奉りたも

物しつとていふは清きもの
かたしうへへありしる御花のつら
たのむものよ花の道たけのつら
きよぬ上つ代のよ花のつら
見たりとて常きよき天の岩屋
しつとていふは清きもの
かたしうへへありしる御花のつら
たのむものよ花の道たけのつら
きよぬ上つ代のよ花のつら
見たりとて常きよき天の岩屋
しつとていふは清きもの
かたしうへへありしる御花のつら
たのむものよ花の道たけのつら
きよぬ上つ代のよ花のつら
見たりとて常きよき天の岩屋

つらとていふは清きもの
かたしうへへありしる御花のつら
たのむものよ花の道たけのつら
きよぬ上つ代のよ花のつら
見たりとて常きよき天の岩屋
しつとていふは清きもの
かたしうへへありしる御花のつら
たのむものよ花の道たけのつら
きよぬ上つ代のよ花のつら
見たりとて常きよき天の岩屋

つらとていふは清きもの
かたしうへへありしる御花のつら
たのむものよ花の道たけのつら
きよぬ上つ代のよ花のつら
見たりとて常きよき天の岩屋
しつとていふは清きもの
かたしうへへありしる御花のつら
たのむものよ花の道たけのつら
きよぬ上つ代のよ花のつら
見たりとて常きよき天の岩屋



一画の空のふちいゝあうえきしやが所の
 せぬをゆゑさうあひに度き郊外は
 民家のあをさおよう遠く見えてさう
 くの群ぐらうさくさうさくさくの炊烟
 もかありハ京とさうしるさうさう
 あれどかくもあゝさうさうさう
 一画さうさうさうさうさう
 かくて推量の臆説ハ無益の事さう
 さう推量の大方ハ違ハさうさう

禮くて後ふ書とるそそ若川麓をふより

つてまたふかすときふいふてまーまの松の家のおきう

ま松ねまのののま信もきうてふふーふのやーん

とあるし

きう松のうまときん折るまき活の松のまのまけま

ふふあふいふきんときひてのまきさしとまやうまてん

